

京都市立京都御池中学校 9年

辻村 仁志

少し前の京都は国内外の観光客で溢れかえっていた。僕の住む細い路地の奥にまで民泊が出来て、毎日スーツケースの音がガラガラと響いていたし、通学路沿いにはホテルがどんどんオープンした。よく利用している市バスはいつも超満員で、乗れないことも多く降りるにも一苦労だった。観光客の大幅な増加によって観光地が過度に混雑し、地域住民の生活や自然環境に悪影響を及ぼすオーバーツーリズムの状態だった。

そんな京都がコロナ禍で静かになり、家族で市内のホテルに泊まったとき「宿泊税」という税金があることを知った。宿泊に税金とは観光都市京都らしいと思い、少し気になり調べてみるとまさに「国際文化観光都市としての魅力を高め、観光の振興を図る施策に要する費用に充てる」ことを目的に二〇一八年十月に導入された新しい税制度だった。この税制定があれば、また京都が観光客で大混雑しても、以前よりは落ち着くのかな、そう思いさらに調べてみた。

東京都、大阪府に続いて、市町村レベルでは京都市が初だそうだ。京都市にある宿泊施設に泊まる国籍を問わないほぼ全ての人が一泊二〇〇円以上の宿泊税を納めなければならない。宿泊額が比較的安価な民泊も対象である。宿泊者は宿泊先に支払い、宿泊先がまとめて納税する仕組みである。現在では、金沢市や福岡県などにも採用されているようで、観光都市では今後も導入されやすい税制度なのだろう。

集められた宿泊税は、市バスの混雑緩和のためのバス増便や観光ルート専用バスの新設などの費用に使われている。観光客の利便性を高めるとともに、バス停のミストシャワーの設置など僕たちの生活環境の改善につながることに使用されていた。

オーバーツーリズムに係る費用をその一因である旅行者が一部負担する、これは住民からすると当たり前に見える仕組みだが、自分が旅行者の立場なら、あまり過剰な額だと宿泊代金の高さを敬遠して京都に泊まらないかもしれない。そうすれば、京都は混むだけで税金が入らないことになるので、匙加減は難しそうだ。

税金は種類も多いし、仕組みが複雑で分かりづらい。それでも、理解しなくていいとは思わない。国は税で成り立っており、納税は国民の義務である。義務であるが、同時に父母をはじめ皆が一生懸命働いて得た大切なお金である。今回宿泊税について調べたことで、税金といってもその種類や徴収は国や地域によって随分違うことを知った。どのような税制度を設け、どのように税金を使うのかは、その国や地域が何を重視し、どんな未来を描こうとしているのかを表現しているように思える。僕たちの未来のためにも、税制度や使い道について理解を深めていきたい。